

たる點多々ありとて其奮起を促された。

來賓塚本氏より亡兄に對する謝辭があつた。

三五 昭和六年史

(一) 寒 稽 古

寒氣凜烈肌を劈く嚴冬、稽古着を肩に曉に尙消え残る明星を仰ぎつゝ、冷え切つた大地を碎けよとばかり吾家を踏み出す時、男子の豪快何ものか之に比すべき。この剛健にして勇壯なる快味こそ、寒稽古に勵む者の持つ偉大なる特權である。光輝ある吾々の部史を緋けば、寒稽古の如何に隆盛で、且つ多大の効顯のあつたかゞ窺はれる。嘗てはその期間も三十日であつたが、現在は種々の都合から三週間に短縮されてゐる。又本年より開始時間も三十分繰り下げられて午前五時になつた。此等の時間短縮は、交通其他の關係上改正も亦止むを得なかつたのであるが、指導者たる者は各個人の精神的活動を旺盛ならしめて、彼に失ひたる所を之に依りて償ふに努めなければならぬ。

本年の寒稽古は一月十四日より二月三日迄行はれたが、前述の如く特に時間が繰り下げられたに就ては、その爲め學校の始業時間に差支へざるやう、朝食を道場に於て攝り得る便宜が興へらるゝこととなり、部員一同殊に子供連中は此の上もない喜びであつた。稽古後一風呂浴びて一堂に會し、半白の老先輩より幼稚舎ボーイに到る迄、温い味噌汁に舌鼓を打ち七杯九杯と椀敷を重ね、歡話談笑一百の大家族が喜々として興ずる有様は、三田ならでは見られぬ美景である。

柔友會の獎勵と朝食の便宜と相俟つて参加者も多く、連日百名乃至百二十三名の出席者を見、各自漲る力を出し合つて熱心に稽古した。

先輩出席者

飯塚 茂、塚本福治郎、峰岸鎮治、三村徳五郎、岩崎清一郎、菅原 浩、宮永金太郎、岩崎三郎、太田次雄。

皆 勤 者

五島三雄、上妻利男、松下春三、徳田 實、沖 革作、吉田重成、永井 定、峯岸弘次、鈴木俊吉、中村仙一郎、新堀昇三、佐久間知三（以上有段者）。

相羽良次郎、清川晃、鈴木千一郎、石塚貫之助、阿部泰助、山本繁太郎、磯邊義介、飯田正治、熊谷喜徳、乳井健一、駒井恒俊、田中久保、武林由雄、藤山洋吉、黒田寛、窪田行正、古屋幸三、小西和夫、秋山正、羽島忠久、飯田武二、坂原太郎、横田作彌、山田正典、笹間猶興、岡島龍吾、峯岸宏、松内則明、安藤道明、金原 毅、榊 正雄、内海勝正、近藤正、内海通勝、縣 稔、杉立恵、山岡嘉也、大原大可、栗本豊夫、越智達彌、玉木六郎、神浦濤太、並木俊雄、木村恭三、須賀明數、峯岸豊雄、藤田順一、田村育三、深浦澄夫、秋山辰馬、平田正彦、笠原慶太郎、三代川洋保、長谷川一男、玄田權七郎、淺沼 基、箱田玄輔、石原 均、立脇忠命、加藤祐二、堀越總一、下村俊雄、河内政信、荒木勇、橋本正夫、内海啓勝、齋藤進、猪谷甫、長田龜雄、栗本良夫、皆川美榮、中村勝藏、乳井龍二、宮本靖夫、山内恒夫、小山増雄（八十八名）。

精 勤 者

永井 定、佐久間知三、羽島忠久、横田作彌、笹間猶興、岡島龍吾、小山増雄（七名）。

二月三日納の會は例によつておでん、しるこで賑つた。三週間の間寒氣と闘つて稽古した疲勞の色も見えず、清々した

氣分で黎明の光を浴びながら八時頃一同登校し、午前十時に道場に集合して塾祖福澤諭吉先生の墓に詣でた。

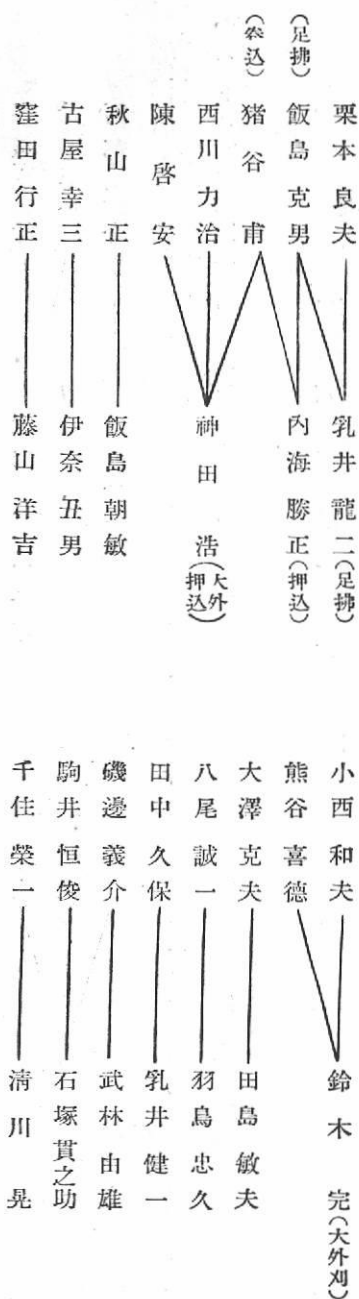
本年度は特に柔友會より精勤者へ大銀盃を寄贈され、且つ朝食の方へも補助金を寄附される等の外、精神的にも非常なる激勵を賜はつた。

(二) 卒業生送別紅白勝負

本年の卒業生送別紅白勝負は、二月十一日後記兩師範勤績祝賀會當日午前中に舉行したものであつて、幼年組の勝負終つて後、左の成年組紅白勝負が行はれた。

(紅)

(白)





右に引續き當日の呼物たる卒業生の五人掛に移つた。卒業生三段松下、四段淺見及び片山の諸氏は、何れも柔道部に其の人ありと知られた豪の者、或は立ち、或は臥て、冴えたる技と力を揮つた最後の奮闘振りは感嘆の外はなかつた。

(三) 飯塚先生勤續二十五年 祝賀會 中野先生勤續十五年 祝賀會

昨年を以て飯塚先生は二十五年、中野先生は十五年勤續せられたるにつき、義塾柔道部及び三田柔友會合同にて、本年二月十一日紀元節の佳辰を選び謝恩祝賀の會を催した。當日は幸ひ柔道部にても、本年卒業すべき部員の送別勝負を舉行すべき豫定なりし爲め、午前中は幼年組及び成年組の紅白勝負を行ひ、正午より祝賀會に移つた。此日前夜來の降雪全く晴れ、綱町グラウンドは三寸の積雪に覆はれ、清く明るく氣温も高く、恰も本日の催を祝福せるが如き好日和であつた。會場たる道場には、學生の手により正門に祝賀會の大掲示を掲げ、場の内外は紅白の幕を以て飾られ、正面床の間には美しい紅白のカーテンを張り、東郷元帥書の額面左方には三十年來柔道部に傳はる例の紅白優勝旗を飾り、場内何となく壯嚴を極む。

定刻には飯塚先生並に令夫人令息、中野先生、林塾長、板倉體育會長、金澤柔友會長、柴田柔道部長、岩崎清七翁、淺

見翁、阿部氏母堂同夫人等を始め、禿頭半白の舊部員約一百名、扱ては大軀重顔の現部選手、幼稚舎ボーイ、普通部生等會するもの五百。式は午後一時柔友會委員長の開會の辭に始まり、先づ金澤柔友會長は立つて、二十五年間十一名の六段者、三十三名の五段者、六十五名の四段者其他四百有餘名の有段者と、一千有餘の有級者を育てられ、人生の半を柔道部の爲めに注ぎ込まれたる師範の功勞を謝し、轉じて義塾高等部のストライキに論及して其誤りたる態度を難じ、八十年の歴史を有する吾が三田の自治制を説き、柔道部員は其傳統的精神を以て三田學生の堅實なる中心たれと説き、柴田部長は兩先生が其百パーセントを吾柔道部員の教育に注がれ、柔道部の犠牲となつて一生を捧げられつゝある高風と人格とを賞揚し、部として此厚恩に報ゆるは一に部員一同が義塾本來の精神を基とし、剛毅不動の大精神を體得して廣く世界に雄飛するにありと結び、板倉教授は義塾體育會長として謝辭を述べべく演壇に立ち、柔道部が常に三田學風のトップを切り、質實剛健の氣風を養ひ、幾多の人才を出して國家社會の爲に貢獻しつゝあるは、體育會の誇とする處にして、如斯きは兩先生が十年一日の如く、三田學風と武道の精神とを部員に吹込まれつゝある賜なりと感謝し、林塾長は徐に立つて兩先生に一禮の後、春風秋雨二十五年、其半生を柔道部の爲に捧げられ、幾多有用の材を社會に出し、年々歳々來り學ぶ青少年を親しく導き不撓不屈の大精神を吹込まれ、堂々たる學生を養成せられつゝある其功勞は、實に偉大なるものにして常に感謝しつゝある處なるが、義塾の兩先生に對する物質的待遇は定めて薄きに過ぎるならんと恐縮に存する次第なれども、義塾の現状より見て御許し願たいと謝し、柔道部は恰も吾應義塾が一所の學塾として甘んぜず、氣品の泉源智徳の模範として社會の先達者たらん事を期しつゝある如く、一ケの武藝修業團體スポーツ團體として甘んぜず、總ての點に於て三田學生の中心となり模範となりて、三田學生の先導者たらん事を期すと云ふ部風を賞揚し、此精神を以て三田の學風に更に剛健の氣風を吹込む事は、兩先生に報ゆる柔道部員の唯一の禮であり義務であり、而して其特長であり、又美點であると戒め、今回高等部ストライキの如きは一部の學生の一寸したる考へ違より起りたる事であるから、數日を出でずして本

來の美風に立戻る事と信するが、柔道部員の如き穩健着實なる學生諸君は、常に塾生の中心として如何はしき思想者流に對しても、斷然立つて義塾の傳統を守り、塾風に一段の剛健なる氣風を注ぎ込む意氣を持たねばならぬと説き、更に三田柔友會員諸君が卒業後二十年三十年後、今日に於ても斯く柔道部の爲め兩先生の爲めに御盡力下さる事は深く感謝する所にして、又他に見出し得ざる大美風である、兩先生には今後永久に義塾の爲に御盡力を願ひ、三十年五十年御勤續の祝賀會を重ねて御迎へあらん事を希望すと結び、大拍手裡に降壇せらるれば、續いて部員を代表して柔道部幹事五島三雄君は兩先生の前に進み祝辭を朗讀した。

祝 辭

惟時昭和六年貳月拾壹日我等方最モ敬事スル飯塚國三郎先生ノ御就任廿五周年並ニ中野正三先生ノ御就任拾五周年祝賀並ニ謝恩ノ式典ヲ舉ゲラルルニ方リ多數先輩並ニ來賓各位ノ臨席ヲ得タルハ偏ニ兩先生御高德ノ致ス處洵ニ欣快ニ堪ヘザル次第ナリ

兩先生ニハ齡既ニ耳順若クハ不惑ニ近キモ日々屑々トシテ親シク我等ノ手ヲトリ指導ノ傍ラ或ハ勵マシ或ハ勞ハリテ我等ノ向フ道ヲ教示セラル如斯ハ正ニ斯界ノ誇ニシテ又他ニ其ノ類例ヲ見ザル處ナリ殊ニ飯塚先生ニ於カセラレテハ其ノ半生ヲ擧ゲテ我等並ニ先輩ヲ此道場ニ於テ訓育セラレ幾多有爲ノ士ヲ輩出セシメタル偉業ハ永ク日月ト共ニ其光ヲ競フニ足ルベシ

兩先生翼クバ益々加餐以テ將來トモ我等並ニ後進ノ指導ト斯道ヘノ御盡瘁アラシクコトヲ爰ニ蕪辭ヲ述ベテ祝辭トナス

昭和六年貳月拾壹日

此時場内嚴肅の氣滿ちて、兩先生の兩眼には露の宿るを見受けた。右終りて飯塚先生胸像除幕式に移り、先づ林塾長及金澤會長の手によりて床の間に張られたる紅白のカーテン一齊に切落さるれば、金屏風を背景に筋肉隆々として生けるが如き飯塚先生の壽像現はれ、滿場の拍手鳴も止まず、斯くて柴田部長より飯塚先生に對し

目 録

ブロンズ製胸像 一 基

右御勤續二十五年謝恩祝賀記念として贈呈候也

昭和六年二月十一日

體 育 會 柔 道 部
三 田 柔 友 會

飯塚國三郎先生

と記せる目錄を贈呈し、中野先生に對してはペンの塾章入三組大銀盃一組（下段盃直徑四寸五分）及び塾章を圖案化したる彫刻を施したる銀製卷煙草箱一個及び

目 録

三組銀盃一個並に銀製卷煙草箱一個

右御勤續十五年謝恩祝賀記念として贈呈候也

昭和六年二月十一日

體 育 會 柔 道 部
三 田 柔 友 會

中野正三先生

と記したる目錄を贈呈すれば、滿場再び拍手起る。次で飯塚先生は演壇に進まれ、謙讓感激の態度を以て謝辭を述べら

れ、「吾輩既に人生の半を此道場に過し、其間青木、福澤、堀切の三舊部長及び現柴田部長を初め義塾幹部當局の理解ある御指導御援助と前後二十有五年間に於ける愛部心に燃ゆる新舊部員諸君の後援により、今日此盛大にして且つ壯嚴なる祝賀を受ける事を得たるは、吾輩の最も光榮且つ愉快とする處にして、之れ全く三田學風と柔道部四十年來の傳統的美風に接しつゝある賜である」と謙遜せられ、「塾風と武道精神とは終極に於て一致すべき大精神なり」と説き、「昨日迄は此機會に於て幾多述べべき事を考へ居りたれども、此壯嚴にして情誼に満ちたる光景に直面して萬感胸に迫り、言はんを欲すれば益々胸迫るを以て、諸君に於ても此點を御推察せられたし」と述べられ、更に「吾輩も老年に近づきたれども、筋肉的健康の維持に努むるは勿論、精神の修練に一層の努力を拂ひ、以て永久に此道場の爲めに奮闘すべし」と結ばれ、滿場感激の氣に滿つ。次で中野先生も同様の謝辭を述べられ、今後斯道の爲め一層努力すべしと告げられ、之れにて式を終り、胸像前にて兩先生並に林塾長、柴田部長、金澤柔友會長の記念撮影あり（口繪參照）、夫れより太田五段及び岩崎五段の審判の下に、本年度卒業生中の三段松下君、四段片山君、淺見君の五人掛勝負行はれ、右終つて本日の呼物たる先輩對現部員の對抗紅白試合に移り、盛大にして且つ眞の柔道らしき大勝負を終りたるは午後六時であつた。

尙林塾長、板倉體育會長が特に來會せられたるは、一同の感謝に堪へざる處にして、又岩崎氏淺見氏兩嚴父、阿部氏母堂が來場せられたるは、半白禿頭の本會先輩の多數來會と共に非常の親しみを加へ、義塾ならでは見られざる事にして、今後も成るべく御來會御獎勵あらん事を切望し同時に感謝する次第である。尙三田柔友會關西支部より松田君を代表として特に出席せしめられ、多大の寄附金を持參せられたるは深く感謝する處である。

祝賀及び卒業生送別大宴會

勝負終了後山王下幸樂大廣間に於て、祝賀並に本年度卒業すべき部員諸君の送別を兼ね大宴會を催した。出席者は左記本會員を始め學生を合せて實に百八十五名と云ふ盛會にして、吉武柔友會委員長は兩先生並に卒業生諸君に特に御臨席を

願ひたるにも不拘粗酒粗肴何の風情もなければ、腰を据へて痛快談昔に返り大に談ぜられたしと希望し、金澤會長は兩先生、並に卒業生に向つて挨拶を述べ、平沼亮三君は兩先生に謝恩の辭を呈し、更に高等部のストライキは義塾の傳統的な美風を傷けたるものにて、近頃義塾に於ける一大恨事なるが、體育會各部に於ては如斯輕擧に組するもの皆無なるを信ずると同時に、殊に柔道部の如き四十年の傳統ある部員は、如斯輕擧を再び三田山上に於て見ざる様常に學生をリードされたしと希望を述べられ、盃を擧げて兩先生の萬歳を三唱し一同之に和した。次で兩先生は起立せられ飯塚先生より謝辭を述べられ、更に卒業生諸君に向つて『柔道の修業は不撓不屈の精神を以て心身の練磨をなし卓越せる技術と動ぜざる心の持方を研究するに在りて、其勝負に際しては自己の有する技量の百パーセントを使ひ得るだけの鍛練が必要である。如何に意氣旺盛なりとも敵に打勝つ技術の練磨に欠けたるものは常勝將軍たるを得ず、又技術卓越して常勝將軍たる事を得るも、其精神的發露たる態度品格に於て欠けたるものは名選手たり眞の勇將たる事を得ず、又技量優秀の士も小成に安んじ大成を期すべき研究を怠り細心の注意を欠けば、一代の名選手も一朝にして其名譽を失ふべし、社會生活の事又總て然らざるはなし、諸君は今名譽ある吾三田の柔道部より社會に向つて巢立たれんとす、此時此際過去に於ける綱町道場生活を忘るる事なく、不撓不屈研究練磨責任を全ふし小成に安んぜず益々注意を細にし、時に或は乾坤一擲の大勇を振ひ、大事と見て恐れず小事と見て侮らず、剛に向つては柔を以て制し、又機に臨んでは柔剛一段の突貫を試み、斯くして大往生の最後迄三田人士として又武人として品位と態度を失はず、堂々として大道を進まれん事を望む。蓋し如斯は老生一人の希望にあらずして八十年の歴史を有する三田山上に湧く眞の希望なるべし』との大教訓を興へられ、卒業生は襟を正し舊部員は直に以て自己を反省し、感激の一場面を出現した。次で今日舊部員軍の總大將たりし中村愛作君は『強將の下に弱卒なしと口を切り、日露海戦の大勝は動ぜざる大東郷元帥を總帥に頂きたる爲なりと云ふが、今日の勝負にて學生軍の敗北せるは阿部兄弟の強剛なる爲にあらずして不戰大將軍吾輩の存在が其主因なり』と大氣焰を揚げ、卒業生及柔道部の爲

に乾盃をなし一同亦之に和し、夫れより盃の廻るにつれ自慢話は各所に行はれ、學生は塾歌を合唱し舊を談じ新を論じ、豫算範圍内の酒量は瞬く間に平らげられ、追加再三時の過ぐるを知らず、大盛況の裡に散會したるは十時であつた。

今回大阪より松田君の來會せるを始め、名古屋より阿部大六君、日光より中野森藏君、野田より中野榮三郎、茂木邦吉君の來會せられたるは、兩先生に於ても非常に満足せられたる所であつた。

飯塚、中野兩師範勤績祝賀會出席者

飯塚、中野兩師範(以上來賓)

林塾長、板倉體育會長、金澤柔友會長、柴田柔道部長、岩崎清七、石渡泰三郎、岩崎清一郎、井上彌之助、岩崎三郎、葉山健二郎、長谷川繼彌、蜷木敏男、近岡源三、尾上繁二、尾山和男、小原勝守、太田次雄、鹿島源左衛門、神崎清一、加藤忠雄、吉武吉雄、谷岡謙、高橋順之助、高田待雄、高松德藏、塚本福治郎、中村愛作、中野榮三郎、中野森藏、向山昌治、内海勝二、野田市太郎、野尻東一、柳井松祐、山本誠一、松尾恒四郎、松田彌一郎、丸井旭、福士吉雄、香下玄人、小口清美、小林武次郎、淺見又藏、安藤徳太郎、阿部優子、阿部大六、阿部英兒同夫人、阿部秀助同夫人、佐野甚之助、桐山勝治、峯岸鎮治、宮永金太郎、下川健太郎、清水行信、平沼亮三、諸遊慎吉、茂木邦吉、菅原浩の諸氏及び學生等五百餘名。

尙當日行はれた先輩對現部員の取組は左の通りであつた。(段の表示なきは前に同じ)

(先輩)

(現部員)

二段

初段

四段

初段

三段

初段

三段

初段

(小外刈)丸井

旭

佐久間知三(拂腰)

(足拂)

下川健太郎

今川敏夫(大外刈)

清水行信

廣田昌太郎(押込)

竹内光一

石井芳雄

加藤忠雄

淺見力

尾上繁二

富樫一彦

野田 市太郎 四段

古田 武太郎

葉山 健二郎 三段

高田 待雄

長谷川 繼彌 (小内刈)

野尻 東一 (持上)

宮永 金太郎 四段

神崎 清一

高松 德藏 (内股)

福田與志三郎 (跳腰)

岩崎 清一郎 (大外刈)

小林 武次郎 (拂腰)

安藤 德太郎 五段

塚本 福治郎

中村 仙一郎 (初段)

澤海 東助

鈴木 俊吉

新堀 昇三

野田 一

峯岸 弘次 (二段)

五島 勇雄 (押込)

古張 信二 (足拂)

清田 惣三郎

永井 定 (押込)

矢野 進一郎

富澤 康吉 (押込)

横田 喜一郎 (逆)

徳田 實

井上 彌之助 四段

松田 彌一郎

嶋木 敏男 (内股返)

阿部 秀助 (大外返)

阿部 勝治 (内股返)

阿部 芳郎

岩崎 三郎 (大内刈)

菅原 浩 (押込)

菅原 浩 (押込)

中野 森藏 (釣込足)

阿部 大六 (大外刈)

阿部 英兒 (背負)

阿部 英兒 (副將六段)

阿部 英兒 (大將六段)

渡邊 重男 (二段)

樋口 良作

吉田 重成 (相手)

沖 革作 (三段)

伊藤 傑

加藤 靖夫 (四段)

上妻 利男 (大外卷)

崎 幸男 (背負)

安東 喜四夫 (押込)

五島 三雄

松本 春三 (三段)

高木 恒次郎 (副將四段)

片山 正周 (大將四段)

淺見 勇

(四) 舊部員對現部員試合記

吉 武 吉 雄

今より十五年前、飯塚先生御就任十年祝賀會が催されたる日、現部員對卒業生の試合が行はれ、夫れが恒例となつて十五年二十年の祝賀會にも此試合が行はれ、今回は既に第四回目で、前三回は總て學生軍の勝利に歸して居るので、學生連は此名譽を永久に維持せんと力み、卒業生は阿部君兄弟を得たのと、昨年卒業の連中に信頼して今回こそはと若返り、學生軍は段の上下を無視し専ら選士の配列に苦心を重ね、五島四段(實力大將)以下安東、崎、上妻の四段連を第五位より第八位に配して攻防兩様の堅陣を張れば、阿部英兒、菅原浩、太田次雄等の勇將を選士係とする卒業生軍も亦段の上下頭髮の濃薄を無視して最善の配列を練り、前表の如く兩軍堂々の陣を張り、午後二時中野先生審判の下に戦は開始せらる。此時迄紅軍の大將は中野榮三郎君なりしが、老茶目中野君は村と書きたる小紙片を自姓中野の野の字の上に張り付け、無理矢理に大將を中村愛作君に變へたり、中村君は當然之れを拒むかと思はれたるが、彼れも千軍萬馬の老将一向に驚かず泰然として引受けたるはあつばれの態度なりしが、筆者の千里眼によれば副將三將に阿部君兄弟が控へたる強味に、己れは不戰大將たるべきを信じ、老將軍泰然自若たりしものにして、扱てこそ老將軍の價値百パーセントと申すべき哉。

扱て紅軍(卒業生軍)の先鋒加藤忠雄君は去年巢立つた新鋭なれば、白軍(學生軍)先鋒淺見初段位は息つく暇もなかるべしと思はれたるが、事實は之れに反し冷汗三斗の内に引分けとなり、二段清水君は三井物産横濱支店に在りて金灣々頭に立ち、幾千の沖人夫を指一本に動かさしつゝある豪傑とて、目醒ましき働きあるべしと思はれたるが、初めの程は攻防共に努力したるも、三分以後は氣力衰へ遂に上四方に固めらる。次で飛出したる丸井君は腐つても天下の三段なり、ナ一

ニ小僧がと小外刈にて廣田君を倒し、更に佐久間君をも一氣に打取らんと内股にて攻め立てたるを見事返されて引下り、禿頭肥滿の老尾上四段に引渡せば、尾上さんよし來たと攻めたるも、頭と體が同一速度に働かず、變だなおかしいぞと云ふ思入れありて引分となり、竹内四段、富樫初段も之又同様の形にて引分となり、次は勝負は飯より好きなりと自稱する下健事下川三段、勝手氣儘の引張込み大外足拂ひに攻め立て、遂に足拂ひにて打勝つたが、石井君少々吞まれた形なり。健さん得意の絶頂今二三人と仁王立になれば、今川初段小粒でも塾の初段はピリツと辛いぞと、太鼓腹の健さんを大外刈に投げ出す。健さんボンブの如き太息をつき、今は變だと負惜しみを云ふ。それではおれがと四段野田市太郎君、大内大外、背負と良い處を見せるが、今一息と云ふ處で腰碎け、最後はヒヤ／＼させて引分となる。次に白軍より躍り出でたるはニツクネームを中仙と云はれ、紅軍の大將中村君の長男遂此間迄はヒヨロ／＼であつた中村仙一郎君である。紅軍の古田四段は府立五中の少年を預り、稽古を續けて居る半現役の事とて、問題になるまいと思はれたが、中村君は幼年組傳來のネバリ屋の大將、而も父君そつくりの跳腰が利き出した油の乗りかかつた潮先とて、容易に勝負決せず引分かと思はれたが、残す處三十秒にして乾坤一擲の跳腰にて物の見事に大物を投げ倒せば、學生軍熱狂器をたたいて聲援す。續く葉山老四段に對しても堂々と攻勢をとり、親護りの深く襟を取り右足を浮かしての跳腰攻めに、さすがの老葉山君も防禦一方勝味薄しと見て居る中に又々内股に打取られ、高田三段の防戦によりやつと食ひ止め、三人共小中村の自信付け藥となる。仙ちゃんの將來は恐るべきものありて正に親勝りの折紙を付けられたり。回顧すれば二十五六年前父君愛作君が右跳腰内股で當時の専門家連を總管めにし、三田柔道部の強味を天下に示したのも此道場で、先生はやはり今日の飯塚先生であつた。而して其令息の仙ちゃんが二十五六年後の今日此道場で、此先生の前で、彼の若く強かりし父君の前で、高段の先輩連を手玉に取つたとは、實に愉快な事で、今日の試合に阿部兄弟が四人で二十二段、岩崎君が二人で十段、五島君が三人で十一段、淺見君二人で五段、中村君が親子で七段、等々々の親子兄弟が敵味方に別れて美技を競ふが如き一したし

み」と美しきは、塾の道場でなければ見られぬ光景で、地方に在住せらるゝ會員諸君も此記事を見られたら、當日の親しき美しき光景は充分に御想像ができる事と思はれる。

斯くて紅軍々兵の倒るゝもの既に十人なるに、白軍は未だ七人を用ひたるのみにて、紅軍形勢非なりと見てサー来いと現はれたる紅軍の三段長谷川繼彌君、學生時代より遙に冴へたる中野先生式の小外刈にて、氣合諸共澤海鈴木の兩初段を立所に切り捨て新堀初段と優勢に引分けたるは當日の殊勳と稱すべく、續いて氣合で行く野尻君は、彼の瘦軀を以て學生相撲界を牛耳りたる業士とて、一氣に野田初段を攻め立て小内刈にて葬り小冠者峰岸初段に向ひたるが、小冠者峰岸は紫帯の出身でヘニヤリヒラリと左右に捌き、野尻の追込み來る出鼻を背負投に打取り、先輩が何れも初めの内は常に優勢なるも、三分後にへたばる形勢を見て取り、初めは軽く逃げ低く構へて時間を延し、あせるを待つて攻勢に出ると云ふ老選士には最も苦手の戦法を採り、宮永四段が疲れたるを上四方に固めて動かさず、神崎清一四段が自分の太鼓腹を持て餘して不自然に攻め入るを足拂にて軽く投げ、少しの疲勞も見へざりしが、四人目に出でたる四段高松一等卒（入營中）は去年出たばかりの新先輩、殊に名人型の老功者として、峰岸君を上四方に押へ、五島二段を内股に古張二段を足拂に投飛ばし清田二段に頑張られて引分け、さすがは赤茄子將軍と唱はれたる切味を見せたが、此の邊選士配置の策戦上手乎。次の白軍永井二段は今上り坂の犬天狗なれど、紅軍も學生時代ヨツペイ福田として知られたる業士なれば、此の邊で二名勝越す事と思はれたるに、現役のバネは測り知るべからざるものあり、さすがのヨツペイ氏も遂に上四方にて身動きとれず、得意の永井氏をして益々調子付かせたり。されど紅軍中の『くせもの』大ちやめ清一郎岩崎君は、何事か期する處あるものの如く、而も平凡に立向へは得意の永井氏左手に敵の袖口を取り、岩崎君は靜に右手に敵の左襟を取りて立つ事二秒、永井氏右手を出して敵の襟を取らんとする刹那、岩崎君の右手は敵の左袖口を握り體を少しく右に開き、永井氏更に追つて襟を取らんとする間一髪ズバリと掛けたる左跳腰に大兵永井氏は飛んで彼方にあり。此間立上りより僅に五秒、態度は

平靜業は電火、未だ寸鐵岩崎君の眞價表へず。然るに何事ぞ次で出でたる矢野二段は、此天下の「くせもの」を何と見たか、不用意に攻め立てたので、又々大外刈に返り打ちを食ひたるは、未だお若い」と申すべし。されど吾岩崎君は息續かず、富澤二段に上四方に固められ、富澤君は近來著しく上達を見せたる幼年出身長身の豪の者として、次に出でたる四段小林武次郎君も體重こそ二十五貫縦横同寸の大肥漢とて、息切れにて直にやらるべしとの定評なりしが、富澤の右より引き廻すに突き入り廻り込みながら、體重を利用してエイとばかり右大外刈を引掛ければ、富澤の體は車輪の如く回轉して彼方にけし飛ぶ、滿場大喝采。武さんいつそんな事覺へたかと呼ぶものあり。されど次の横田君とは同體に倒れて紛れる内に腕逆を取られ、あわてて手を打ちたるは大餘興にして、武さんは依然と武さんで良い處がある。横田君は獨りで大まぐるを釣上げた様な感じで、次の安藤氏も一息と攻め寄せたが、安藤君も「安徳の三分間」と云ふ異名を取りたる程出鼻の強き人として、攻撃ならこつちが本場だと攻めて攻め上げ、見事の背負將に一本と云ふ利那腰碎けに終りたるが、彼の業が利きたらんには蓋し當日第一の晴れ業なりしならんと、其夜迄惜まれたり、次は卒業生對部員試合に卒業生軍より三度出陣する塚本五段、最も頭の頂きに底光を見受くれども元氣旺盛、本年も寒稽古を大半通したと云ふ人間離れの元氣者（尤も一名章魚と云ふが）にて、敵の出鼻を釣込んでの内股には千金の重味あれど、此日の御敵徳田二段は引張る主義の堅實型とて、塚本君意の如くならず優勢のまゝ引分けたり。

次の渡邊二段は立つて良し寝て更に強き白軍の中堅とて、生命保険界の麒麟兒井上彌之助君を後締に、大阪代表の松田四段を上四方に押へ中堅然たる働をなしたるが、最後の蜷木四段は之れ元稀に見る強豪とて、稽古中絶の今日と雖も渡邊君の攻撃一向に手答へなく、内股に行くを大きく返へされて引下れば、續く樋口君は現部員中ネバリ屋の第一人者として、さすがの蜷木君も少々持餘したるが、遂に大外刈に打落し、吉田二段を迎へたるも、此時既に息切れにて遂に棄權して引下る。次は阿部の末弟秀助君は先づ軽く防禦し置き、よい處で一本と云ふ策戦らしかつたが、吉田君の大内刈を見事返し

たれども一本とならず、吉田君驚いて頑張り遂にチャンスを失して引分けたり。次は學生軍中の元氣者新進二段實力三段の沖革作君、紅軍は去年出たばかりの桐山四段なれども、沖君の進境著しく、兩者優劣なく元氣に戦ひ遂に引分けとなる。次は白軍の老功伊東三段對紅軍太田五段なりしが、太田は一昨年出たばかりの名人とて、忽ちにして内股返しに伊東を倒し、加藤三段と引組みたるが、加藤君此頃著しき進境を見せ、遂に此強敵を引分に食ひ止めたるは蓋し大成功と稱すべし。之より白軍は其頼みとする上妻、崎、安東、五島の四段の順となり、戦の大勢は此所四五組にて決する事とて、學生軍は非常の緊張振にて聲援又盛なり。此時飯塚先生は中野先生に代りて審判に立たれ、上妻四段對阿部芳郎五段の對戦となる。上妻君は勝氣一天張にて息をもつかせず大外刈に攻め立て、阿部君をして乗ずるすきを與へず、從て阿部君息を回復する餘裕なく、遂に大外刈に打倒さる。阿部君に代つて上妻君を引受けたるは紅軍の頼みとする岩崎三郎五段にして、一昨春卒業の新鋭なれば、上妻君の猛襲を軽く避け乗すべき機を待つものの如くなりしが、上妻の攻撃愈々猛烈にて、大内刈大外刈を連發するに岩崎君も釣込まれ氣味にて、之亦足業にて應戦し火花を散らして戦ひ、上妻君更に攻勢に出で岩崎君を道場西北角に追込み、岩崎君體を左に避け、上妻君が廻り込まんとする寸隙に乘じ、電光石火の如く大内刈に出づれば、さすがの上妻君地響打て倒れたり。岩崎君の老巧さは令兄清一郎君と共に近代名人と稱すべく、參觀せられたる父君清七翁が破顔一笑せられしも亦宜なるかな。然れども又上妻君は破れたりと雖も、此一戦にて大なる教訓を與へられたるものと云ふべく、更に稽古に柔か味を加ゆれば其進歩著しかるべく、前途洋々大成間違なかるべし。次で上妻君の仇を報ゆべく現はれたる崎四段は、昨夏大負傷せる左足を引すりながら好敵來れと引組み、岩崎君の右袖左襟を取り得意の背負投に出でんとし、岩崎君又良く之れを避けて足業に攻めたるが、上妻君との一戦に息切れ遂に崎君一流の背負投にて参りたり。此時サー來いと近眼の巨眼を光らせて立出でたるは氣合で行く菅原浩君。崎君が背負に攻むるを左右に敵の袖を握りて軽く捌き、應戦三分同體に倒れたるが、如斯機會をムザ／＼逃すが如き菅原君ならず、ピタリと上四方に固め大盤石

の重味を見せ學生軍思惑違の觀あり。而して白軍よりは義塾始まつて以來の寢業の名人と云はるゝ醫科の安藤四段小兵なれども大難物なり。されど菅原君も寢業は得意寝るなら寝て來いと引組み、先づ安藤君横四方より上四方に移りたれば、菅原君之れから一番ハネ返さんとする利那腰の當りギリと音あり、中絶者の悲哀、さすがの浩さん腰の弾力を失ひてコロサンす。此時靜靜と出陣に及びたるは日光より馳せ参じたる老将六段中野森藏君(此時日光の森藏親分と呼ぶ茶目あり)茫漠たる風姿の内に自然の重味を見せ、安藤君が背負に攻むれども大釣鐘は小鐘木では鳴り出さず、安藤君何とかして寢業に移らんとすれども、中野君は阿部君兄弟と共に綱町道場の生みたる名人とて、既に數人の子の父となり、頭髮又其二〇%を残すのみにて一見五十老と見ゆれども、却て安藤君を後締に締め上げ、愈々締めたと思はれたるも、首も胸ものべつ一體と云はれる安藤の事とて、間一髪の處にてクルリと逃れ、時來りて引分けたるは蓋し當日の大勝負なりき。

扱て此時紅軍は最早三將を残すのみなるに白軍は五將を有し戰愈々關ヶ原に近づきたるが、白軍は實力大將五島四段を出陣せしめ、強敵阿部大六君を打取らんと學生軍總應援の下に對陣す。五島君は近頃技圓熟し、體力亦俄に加はり、昨秋講道館の勝負にも四段四人を投げ飛ばしたる豪の者として、滿場靜まり返りて見入りたるが、阿部六段は此頃柔道は全く中絶、ゴルフに熱中し居る事とて萬一の事なき哉の不安もありたれども、五島君が横に横にと攻め立て、或は後に廻り前へ引づり息をも付かせず攻め立つれば、阿部君最早息をはづませながらも軽く捌き戰ふ事三分、五島君右手へ敵の左襟を取つて前に引くかと思へたるが、阿部君五島の引くに付け入り右足拂と見せ逆に左足拂に移れば、五島君半圓を描いて彼方に飛ぶ。其變化の妙、スピードの早さ、技の丸味、さすがは天下の大ちゃんなりと滿場其美技に酔ふ。次で白軍松下三段は防禦の名人なるに、阿部君中絶の悲しさ最早息續かすフラ〜となり、松下君も攻むるに道なく遂に引分くれば、白軍よりは片山四段堂々の體軀を運ぶ。氏は本年卒業すべき偉材、道場生活の最後に一花咲かせんと決死的態度はものすごき計りなり。されど紅軍の副大將阿部英兒君は、如何に稽古中絶とは云へ、天下無敵の名人とて一たまりもなかるべしと見

へたが、片山君は奮闘見るべきものありて六分を保ち、阿部君は中絶の爲め息迫まりて或は引分けかと思はれたるに、片山君が左手に阿部君の左腕の邊を握り多少押氣味に迫まれば、何條以て逸すべき電光石火二十五貫の大兵阿部君の體片山君の懷に飛込むよと見れば、一本背負の一撃に片山の巨體は文廻しの如く吹き飛んだり。大六君の足拂と云ひ、英兒君の此技と云ひ、講道館の勝負等には到底見られざる妙技にして、三田の花、天下の名人たる名に恥ぢず、實に堂々たる至寶なり。されど英兒君も此頃少々體を遊ばせ稽古に遠ざかりたる爲め益々肥滿し、小敵との一戦にて既に息續かず、白軍の大將淺見四段とは遂に引分に終りたり。

斯て紅軍は豫定の如く不戦大將を残して優勝し、飯塚先生より紅白優勝旗を授與せられ、萬歳裡に散會したるは既に六時なりき。筆者は此日の試合全體に涉り兩軍共『眞の柔道らしき』技にて攻め合ひ、眞の柔道は三田にのみ残りりと云ふ感を深からしめたり。

(五) 新入部員歡迎紅白勝負

五月十日

(紅)

(白)



九人掛

伊奈 丑男
飯田 武二
大澤 克夫
羽鳥 忠久

古屋 幸三
千葉 藤雄
飯田 正治

二段 沖 革 作



● 段外山 本
● 同 熊 谷
● 同 磯 邊
● 同 伊 丹
● 初段 岸
● 同 不 村
● 同 相 羽
● 同 石 井
● 同 長 澤

(六) 第二十回對四校聯合勝負

六月六日、双方五十名宛、三將を殘して塾方の勝利に了つた。

三五 昭和六年史

伊丹 正治
箱田 玄輔
熊谷 喜徳
武林 由雄

山本 繁太郎
磯邊 義介

(本塾)

(聯合軍)

(同押込)

柳井 敬三

段外

藤木(水)

段外

(足拂)

中林 久良

三

田(農)

(押込)

峯岸 猛

初段

山(立)

(押込)

清川 晃

岩

原(農)

(水)

阿部 泰介

崎

山(水)

(大内刈)

田中 良平

原

(農)

大宅 五郎

塚

口(水)

永田 幸雄

石

井(工)

(背負)

相羽 良次郎

川

田(水)

石井 芳雄

河

瀬(工)

(同押込)

長澤 金次郎

安

原(立)

(小内刈)

佐久間 知三

西

郷(水)

廣田 正太郎

芹

立(農)

(同押込)

中村 仙一郎

芹

立(農)

(同押込)

鈴木 俊吉

柳

谷(農)

今川 敏夫

石

塚(農)

(同内股)

新堀 昇三

野田

一

段

野田 一

城崎 榮之助

岩

下(工)

(同絞)

梅澤 正治

名

和(立)

(跳上)

梅澤 正治

谷

口(農)

五島 勇雄

太

田(立)

五島 勇雄

光

本(農)

五島 勇雄

荻

原(工)

五島 勇雄

末

永(農)

小宗 正一

田

中(農)

住野 正春

杉

浦(立)

富澤 康吉

須

藤(農)

永井 定

今

島(立)

(小外刈)

樋口 良作

松

永(立)

(押込)

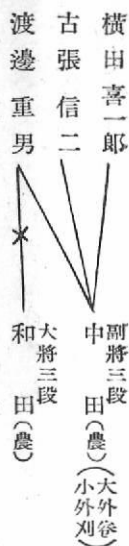
吉田 重成

松

永(立)

(押込)

(七) 第四十一回大會

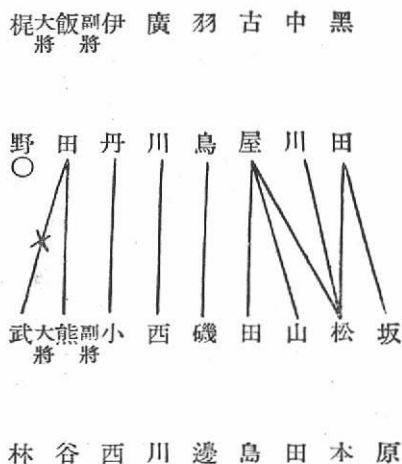
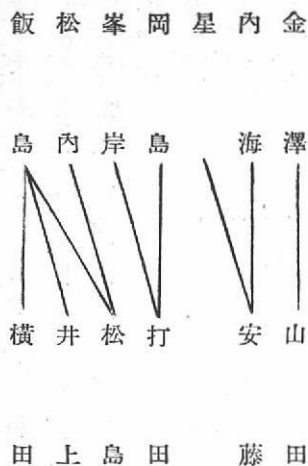


十一月一日午前中幼年組及び成年組紅白勝負あり、左の對部試合は普通部の優勝となり、それより部員對外來者の一本勝負に入る。

普通部對商工部試合

(普通部)

(商工部)



(輪商) は高輪商業學校、(學習) は學習院、(明學) は明治學院、(友武) は友武道場、(秋元) は秋元道場
 (早高) は早稻田大學高等學院、(至剛) は至剛館、(早大) は早稻田大學、(農大) は東京農業大學、(中大) は
 中央大學、(日大) は日本大學、(三田) は三田署、(印度) は印度人

有級者一本勝負

	(輪商)	澤	田		(友武)	森		(秋元)	村
	(一)	羽	鳥(大外刈)		(五)	大	澤	(九)	西
	(學習)	四	條		(明學)	栗	山	(早高)	館
	(二)	小	西		(六)	柳	井(合業)	(二〇)	箱
	(明學)	武	谷		(印度)	デイスパンデイ		(秋元)	橋
	(三)	古	屋(大外刈)		(七)	廣	川	(一一)	熊
	(友武)	曲	田		(明學)	吉	田	(學習)	有
	(四)	伊	奈(大外刈)		(八)	中	川(跳腰)	(二二)	松
投之形		五	島		固之形	沖	革	極之形	安
		崎	幸			古	張		加
			雄			信	三		藤
			男			作			靖
									夫
									夫

上半身筋肉練習法

印度人

ボース

有段者一本勝負

(初段)

(三) 田
阿 阿

部 部

(三) 早大
山 武

木 (跳腰)

(五) 早高
水 長

野 澤

(農大)
杉 永

村 田 (背負)

(四) 中大
吉 鈴

木 田 (逆)

(二) 段

(中大)
小 梅

沼 澤 (大外巻)

(八) 日大
野 小

村 宗 (持上)

(一〇) 早大
柳 五

井 (合業)

(至剛)
坂 横

田 口 (大外刈)

(九) 至剛
芹 山

田 形

(農大)
谷 古

口 張 (足拂)

(三) 段

(日大)
白 沖

澤 (合業)

(農大)
中 加

田 藤

(八) 北陸地方武者修行記

安 東 記

去る昭和三年吾が義塾と好敵早稻田大學とは再三再四の折衝を重ね、漸くオール慶早戦の前提とも見らるべき豫科高等部對早稻田第一第二高等學院の對戦の協定が遂げられた。

爾來鋒を交へる事三回、一勝二敗の戦績を残し、今秋の交戦を見ずして中止の止むなきに至つた。この中止の理由は多々あるが、それは次項中止の記録に別に述べる事とし、茲では單に吾々の中止による鬱憤を如何にして晴らしたかと云ふ事についてのみ述べる事とする。

吾塾軍のメンバーは、本年の早高に對しては壓倒的な充實を見せてゐる。又メンバーの充實と共に稽古も十二分にされ昨年之如く負傷者も全然出さなかつた。丁度その矢先豫科對學院の試合は中止しようと思ふ早稻田よりの申込で、高鳴る胸と張切れる腕を押え涙を呑んで中止する事とした。吾々の漲る元氣はやり場がなくなつた。今更他と試合しても仕方がない。鳩首談合の結果武者修行の決行に著手した。各自部署を定めて各方面へと活動を開始して、絶大なる先輩の御後援と部員の熱心と努力が相俟つて漸く願望成就した。善は急げで早速十一月三日明治節の佳辰を下して武者修行の途に上る事になつた。

東京より松本へ

新宿驛八時集合。参加者崎、上妻、加藤、沖、伊藤、杉山、樋口、横田、永井、古張、今川、安東の十二名で、五島兄弟は丁度嚴父の佛事で一日遅れて松本で落ち合ふ事となつてゐた。尙飯塚、中野、兩師範は御家庭の都合上御参加出来ず只中野師範は新潟から一行に参加して下さることになつた。

八時二十五分發の列車で部員其他關係者の見送を受け元氣一杯征途に上つた。

空は吾々の門出を祝ふ様に絶好の秋晴れだ。列車は大武藏野に出た。見渡す田園を縫つて暮進する誰の顔にも云ひ知れぬ期かさが見える。浅川の御陵驛を過ぐる頃角力部其他から頂戴した果物に手をつけ始めた。朝食を攝つたかを疑はれる程の頬ばり方だ。列車はやつと吾々をほんとの秋景色の中に運んでくれた。銀座あたりの埃で眞白くなつた營養不良のブラタナスの並木とは少し違ふ。眼に入る風物の一つ一つ皆觀賞に價する。

名にし負ふ笹子トネルの笹子驛で、誰か餅を買つて馳走した。箱の上に曰く

名物に旨いものあり笹子餅

誰かには氣の毒だがそれ程でもない。やはり世間で云ふ名物に旨いものなくの御多分に洩れない。

此の頃より詩人永井の定さんが盛んに景色を賞で、日誌を取り出して十七文字を書き連らねて威張り出した。皆からも一句と云ふので迷句も相當集つたらしい。只伊藤の傑さんの一句旅行中詠んで得意がられたものが記憶に残つてゐる。

トネルに入つて話が闇に入り

列車は甲府盆地を過ぎて、傑さんのお國自慢の天龍の伊那地方の眞只中に飛んで來た。傑さん得意の絶頂こゝ二日松本と長野で御厄介になるのだからと思つて、ハイ〜と畏つておいた。

夕刻五時頃松本についた。同地では左記の方々のお出迎を忝ふし、且つ色々御世話になつた。

松本中學 西川幸二郎 同 磯部 章 松本二中 武井吉次郎 松本商業 中野源三郎

松本高校 大新田勝海 同 篠原 孝義

早速宿泊地なる松本郊外の淺間温泉へ第一宿を過すべく急いだ。時節柄とは云へ意外に靜かだ。一浴して汽車の煤煙を流し、翌日よりの稽古に備えて早々床についた。

明くれば四日素敵な秋晴れだ。五島兄弟も夜行での疲も忘れた様な元氣な顔で八時頃馳せ参す。

午後第一日の修行なる松本一中に赴いた。丁度午後の授業中であつたので、同校師範の御好意で天主閣に上つて見た。

松本盆地の織りなす錦を展望するを得た。

稽古は一中、二中、商業それに二三の高校生であつたが、何分授業其他の關係で人數の意外に少かつたのは残念であつた。各員物足りぬ腕を撫して四時半頃終了、道場より直接驛に急いだ。關係諸氏より松本産葡萄の大籠を戴き、多數の見

送りを受けつゝ長野へ向つた。

松本より長野へ

秋の日はすぐ暮れる。松本より長野への旅は修行中最短の旅で、葡萄合戦と稽古中の武勇談で、七時半頃長野驛に多数の先輩其他關係者諸氏の出迎えを受けて到着。その足で早速遅北館に旅装を解いた。

本旅館の若主人は塾員の方である。三田會の方々の御厚志で夕食を共にし非常な御馳走になつた。特に信州信濃の新蕎麥の味は又格別だ。吾々も部歌應援歌等で若人の聲の御馳走で應酬した。

食後塾生小林君より澤山の果物を戴き、他では味はひ得ぬ新鮮味を満喫した。

軒を打つ雨垂れの音をきき、明日の天氣を氣にしながら床につく。

物凄い猛雨に床を離れるのが心細い。午前中の暇を利用して善光寺様へ參詣場と戯れた。廊下の暗黒道の傳説に一同幸運を賭して突入、鼻をつまゝれたつて解りやしない文字通の眞の闇。怪しき未來の良夫君達謎の鍵に死物狂ひ、果して一同の幸運は？

午後土砂降りの路を武徳殿支部へ、稽古参加者は中學、商業、師範五拾有餘名盛大を極めた。何しろ田舎稽古の體の堅いには一同驚いた。

夕刻信濃を後に越後長岡へ、相變らずの武勇談だ。話も自惚だけは抜け目がならしい。

長野より長岡へ

長岡、本修行中の最大失敗、東京出發前の豫定表の時刻が長野での違算で一列車遅れた。長岡驛には先輩長谷川氏と同地有段者會の産江氏の二人がお出迎え下さつた。一列車前に土地の柔道關係者が多数お出迎え下さつた山、一同遺憾やる方なく明朝無禮を謝す事として宿へ着いた。

明くれば六日、陰氣の雨はやつと上つたが空はどんより薄寒い。早々當地の奇景なる軒下を辿つて、當地有段者會諸氏に非禮を謝して廻つた。稽古は長岡中學道場だ、参加者七十有餘名、二時間餘旅行中最も感じのよい稽古をした。終了後早速新潟へ出發の豫定だつたが、先輩山田又司氏其他の方々のお言葉に甘へ、新潟へ時刻變更の打電をして御馳走になる事とした。

會の進行と共に、諸氏の隠し藝に部歌應援歌の應酬で異常な賑ひを呈し、遂にお國も考えないでおけさ踊の一節も御眼にかけた。昨夜の到着の時に反して萬歳の聲に送られて一路新潟へ向つた。

同慰勞會出席者芳名

山田又司氏 長谷川彌馬太氏

山 崎氏

小林仁三郎氏

芳賀國男氏

長部清治氏

稻田成實氏

高橋文次郎氏 志賀 定一氏

産江植吉氏

井口吟次郎氏

池野倉藏氏

長岡より新潟へ

稽古の相手が幾ら中學生でも、二時間餘の立続け、剩え夜旅と來ては流石の豪傑連も幾分疲労の色が面に現れて來た。然し誰を見ても瘦我慢は相變らずの一手販賣だ。各自先刻の御馳走で上々の御機嫌、鼻息は相當のものだ。

今日あたり落ち合ふ筈の中野師範が見えない。恐らく新潟ではお會ひ出来るだらうと一同期待してゐた。新潟へ着いたのは可成り晩く、十一時頃だつたにも拘らず、多數の方々の御出迎ひに恐縮した。

當地での豫定は二泊する事になつてゐた。宿について御出迎の諸氏に一通りの挨拶もそこそこに一風呂浴びて、先刻迄の大氣焔も何處へやら、一瀉千里で白河夜舟だ。

翌早朝中野師範の御入來を得て、一同意氣軒昂、同師範の御子息が重患の折からたつてお出で下さつた事は、一同何より深く感激した。

稽古は午後二時より新潟武徳殿でやる。参加者は中學、師範商業及び高校生教習所員數名、總じて五拾餘名、一個の都會としては少な過ぎる。且つ武徳殿の狹隘なので、危険で一同荒れ廻る事が出来ず、物足りない感なきにしもあらずだが然し中野師範を得て、精神的にも肉體的にも樂になつて來たことが、大いに關係してゐるのだと思ふ。

稽古後控室で参加者一同と茶菓を戴いて、中學生や高校生諸君の木場オケサ節及びオケサ踊を聞いたり見たりすると、流石は本場だと大いに感心した。

散會後先輩村田氏の厚意で、當地の東京會館とも云ふべきイタリヤ軒の晚餐會に招待され、大變な御馳走になり、隱藝廻りに打興じて非常に愉快なる夕を送り得た。歸館後先輩横山氏の御來訪あり、又々御馳走になり、このところ大當りの有様だ。旅しては先輩の有難さを今更ながら泌々と感じられる。

翌朝が早いので後一日の會津若松に備へて床についた、新潟で色々とお世話下さつた方々の芳名を記すれば

村田三郎氏 横山 巖氏 中 野氏 平原弘毅氏 鈴木 泰氏 渡邊義盛氏 旗野喜太郎氏 佐藤喜久治氏

新潟より會津若松へ

一週間の行程も今日一日となつた。午前八時頃多數の方々に見送られて、最後の目的地會津若松に向つた。此の磐越線は阿賀川に沿つて一路上流に走つてゐる。新津を過ぎる頃より、越後平野の平凡に比して、稍々山も迫つて來た。山々の紅葉に次第に眼を惹きつけられ始めた。列車は狭い川の流域を右曲左折して進めば、谿谷の美、錦葉の映え、雨後の清流皆吾々の數日の奮闘の勞を犒ふに充分であつた。車掌に交渉して、其車室を占領し、速成三等展望車を作り、四方の風景を賞つゝ時を過した。

會津若松に着いたのはお晝頃であつた。同地は古張信二君の出身地、同君得意の巻である。驛では中學、工業學校の兩師範生徒諸君の出迎へを受けた。早速舊城址會津城に赴き、旗亭に晝食を攝り、稽古時間迄休息した。古張君に城址を案

内され、一通りのお説を承はつた。信州における傑さん、會津の信ちゃん、お國自慢は相變らず多分に御所有だ。

二時頃より中學道場で稽古開始、集るもの六拾餘名、最後の稽古だ、皆捨身的猛闘。然し稽古にはやはり幾分の疲勞が見える。入替り立替り二時間餘の稽古にホツトして、寄宿舎の湯に汗を流して、宿泊地東山温泉に落付いた。

今夕は慰勞並びに卒業生送別の意を兼ねて小宴を張つた。谿川の流を聞きつゝ過ぎし事ども語りつゝ、時の移るを忘れてゐた。明朝白虎隊の飯盛山へ詣でる事を約して、旅の疲を精算すべく床についた。

飯盛山の參詣は時間の都合上残念ながら中止した。一週間振で恙もなく一同揃つて懐しの都へ歸る事は、何となく嬉しい様な氣もする。九時過ぎ會津磐梯山を見上げてサヨナラした。一同出發の際の元氣は失せて、疲勞の限のみピカ／＼してゐる。列車の脚の遅いのを慨しつゝ、上野に着いたのは夕六時頃、翌日道場で再會を約して解散した。

行程一週間、負傷者も出さずに豫定通り終了した事は、何よりも結構な事であつた。是も皆在京及び地方在住の諸先輩並びに關係者御一同の援助の賜にて、衷心より感謝する次第である。

(九) 慶早戰停頓に就て

上 妻 記

(柔友會員に對する報告であるが當時の事情を詳にせるを以て茲に掲ぐ)

昭和三年秋、慶早豫科柔道對校試合が陸軍戸山學校道場に於て開始されてより既に四星霜、其間常に柔友會員諸氏の一方ならぬ御激勵御指導と御援助とを賜はりしに不拘、第一回不戰者一人を残して勝利を獲得せしのみ、他は第二第三回共に連敗の苦杯を嘗むるに至りしは、吾々部員選手の等しく遺憾とし衷心より御詫びする次第である。

爾來吾々部員は臥薪嘗膽、より良き統制の下に光輝ある部の歴史と其の名譽とに誓ひ、來らんとする第四回戦こそは必ずや敗慘の汚名を雪がんと一致協力、一途其の準備に邁進したのである。名譽と歴史のために戦はんとする意氣と熱而して感激あふるゝ練習は毎日繰返された。然るに吾等待望の第四回戦は遂に來らず、選手は茫然自失唯來るべき會戰の時機に望みを抱きつゝ昨年を送るの外はなかつた。

今私は我が部のより良き發展のため、部の現状に銳意御關心を有し、終始部員の鞭撻と指導の地位にある柔友會諸先輩に對し、何故對早稻田戦が中止の止む無きに至りしかを報告せんとするものである。

爰に便宜上豫科戦開始當時の事情まで遡るを許され度い。昭和二年頃は我部のゴールデンエイヂとも云ふべき淺見、中本、岩崎、五島、古賀、門倉等々超拏級強剛の時代であつた。當時之等の部員諸兄は、日頃鍊えし三田柔道の眞隨を示さんものと好敵全早稻田に對し挑戦申込をなしたのである。勿論當時の塾軍は其の實力に於て早稻田に優るとも劣らざる事は、自他共に許した所であらう。此の申込に對して早大側にては如何なる理か、塾側の十五名に對しあくまでも二十名を固守して譲らず、遂に此點に於て折り合ひつかず、試合は不成立に終つた、塾側としてはチャンスを逸したる形、非凡の技と力とを有しつゝも、せん方なく暫く時機を待ちて、然る後再び協議せん事を約し、會合を打ち切つたとの事である。

此處に生れ出たのが現在迄の豫科戦であつた。この意味に於て當然之は全慶早戦への過渡的前哨戦にして、近々全慶早戦の出現に依り消滅すべき性質のものである。以上に依りて豫科戦の有する役割が如何なるものか、大略明らかになつた事と思ふ。

豫科二回戦は従前通り何等の支障も無く續行されたのであるが、全慶早戦に關する話題が兩校間に持ち上つたのは、其の翌年の秋三回戦準備交渉の時であつた。其の時は塾側早大側共に不賛成には非ず、條件に依りては寧ろ賛成なる旨表示したのであつたが、双方の主張遂に一致を見るに至らず、全慶早戦の件は翌年に譲る事とし、豫科三回戦を續続したので

あつた。第三回戦は多少の支障はあつたにもせよ高師道場にて舉行、結果は不戦者一人を残して惜敗の恨を呑んだのであつた。

。昨年の六月頃吾々部員は秋の對早稻田戦を従前通り豫科のみにて決行するや、又は全慶早戦を行ふやに就き協議したのであるが、一應早大側の意見を聴取する事に依りて態度を決すべしとの意見の一致を見たのである。

其の後私は早大側の意向を覗ふ爲、個人的に一二の幹事と會見したが、當時早大側にては支那滿洲方面への遠征が決定し、其の準備等にて相當多忙を極めて居るとの事にて何等まとまりたる回答も得ず、單に彼等の歸京を待ちて正式に會合する事を約したに過ぎなかつた。

七月の葉山合宿は秋の全或は豫科戦を豫期し、必ずや此の度こそは仇敵早稻田を屠らんものと選手の意氣物凄く、五島首將以下に近年比類なき猛練習が展開された。

暑中休暇終了と早大柔道部遠征の歸京を俟ちて、全慶早戦第一回會合は九月中旬講道館樓上に於て行はれた。會合參加者は塾側より五島、安東、加藤、沖、小生の五名、早大側は伊勢、尾崎の兩名にして、交渉は大體選手の數、試合規則、場所等の順序に従つて協議する豫定であつた。

先輩諸氏も既に承知の如く、對抗試合殊に柔道の場合に於ては、其の勝敗の鍵は選手數の如何に負ふ所多く、従つてその決定は最も重要であり且つ困難であるが、果して此の會合に於ても、選手數の點に於て兩校の主張は餘りにも相違し、遂に決裂の已むなきに至つた。

我が部の現状は遺憾ながら都下大學殊に早大に對し、有段者特に三段以上の數に於てははるかに劣勢の地位にあり、若し全早稻田と戦はんとするならば、最大限度を十五名とし、之は絶對に讓歩不可能なる事は選手一同の一致したる意見であつた。而して以上のメンバーに依るとも吾々は五六名の二段を配備せねばならぬといふ不利な状態である。之に反し早

大側にては大將を五段に、以下四段十名、三段二十名といふ段數に於ては比較にならぬ堂々たる陣容にて、寧ろ選手の選定に困難を生ずる有様なれば、最少限三十名にて之以下ならば到底應じ得ないとは、彼等の固守して譲らざる主張であつた。十五名と三十名都合十五名の差があつたのである。

我々は義塾柔道部の現状が、體力と技倆とに於て早稲田の敵に非ずと一般に見做されて居るにも不拘、奮然全慶早戦を決心せんとするの意圖は、一に我が部に一大刺戟を與へ、以て往時の隆盛に復らしめ、光輝ある部史と其の名譽を維持せんとするに外ならないのである。

吾々は此處數年降服の憂き目を見るときも、必ず近き將來に於て吾々の企圖は報ひられ、再び三田柔道のおまねく天下に其の名を轟かすべき日あるを確信し、部員の團結を以て早稲田に當らん事を覺悟し誓約したのである。

塾の名譽の爲めに、部の歴史の爲めに我々は犠牲になるとも戦ふのだ。私は此の學生らしき感激、意氣、熱のみが現在の柔道部を救ひ出すものなる事を信ずる。選手各自の悲壯なる決意に接する時、何者をも退けて戦つて見たい。然し戦は其處に如何なる條件が存するとも、勝敗を度外視する事は出来ない。何故ならば敗北の慘めさは他方部の萎縮を意味するからである。されば戦ふ以上相手を倒さねば止まぬの意氣ありて初めて試合の意義が存するのである。負けるものか勝つ死すとも勝つ、此處に男子の意地があり、技術の發展が見出される。今早稲田の主張に従つて三十名にて試合を行ふ時、其の結果は如何、我々の敗北は當然ではあるまいか、私は或は試合にならぬ事を恐れるものである。

如何に塾側が意氣と熱に於て優るとも、三段十五名に對し、初段を以てしては特殊な試合方法に依らざる限り到底戦へない事は明である。若し塾側が更に十五名を増加する時は、大部分初段を以て戦はねばならぬ事を申添へておく。

吾々は今述べし如き部の現状を有りのまゝ告白し、早大側の譲歩を切望したのであるが、遂に受諾されなかつたのである。早大側としては三十名を譲歩する事は先づ選手の決定に困難を生じ、惹いては部内の統制を亂すの恐れがあるといふ

のであつた。選手數に於て以上の不一致を生じた會合は時期に於ても既に遅そ過ぎ、準備困難との理由に依りて何等の進展をも見ず、結局本年の會合は之を以て打ち切りとなすも、以後はかゝる會合を重ね、來年の試合に備へん事を約し解散したのであつた。

前述の如く學生側の交渉は不幸にして不成立のまま終つたが、双方の有志先輩間に於ては、此の決裂を何とかしてまじめんものと御奔走御斡旋の勞を取つて下されたのであるが、今潜越乍ら其の經過の大略を述べれば次の通りである。

我が柔友會にありては夙くより全慶早戦を實現せんとの考へより、吉武委員長を中心に岩崎、阿部、菅原、太田、高松等々の諸先輩を委員とする全慶早戦準備委員會なるものを設け、事務御多用の身にも不拘、多大の時間を割き御盡力下されし事に就きては、我等部員の深く感謝して止まぬ所である。

早大側幾多の先輩に對する我が委員諸氏の最善の努力御交渉も、往々彼方の連絡まづき爲め、極めて僅の進展を見たに過ぎず、結局不成功に終りたるは返す／＼も遺憾とする所である。我が部に配するに柔友會あるに反し、現在早大にては現部と先輩間に何等連絡の機關となるものなく、折り合ひに相當の不便ありたるは事實にして、交渉不成立の原因も此處に存するのではないかと思はれるのである。斯くの如く吾等が最後の望みたる先輩間の交渉も絶望となり、吾々としては唯時機を待つの外なきに至つた。

然らば何故豫科戦を中絶したか、全慶早戦に關する學生側の交渉に續いて先輩側の斡旋があつた事は既に述べた所であるが、之が問題の複雑化につれて遅々として徒らに時日を要し、確然と交渉の斷たれたるは十月中旬であつた。

無論塾側にては三回戦のメモバーに變化は無く、四段二名を筆頭に三段二段の豫科としては堂々たる陣容にて、準備は少しの怠りも無く繼續されて居たのであるから、遅しとは云へ早大學院に對し交渉する事にしたのであるが、是より先講道館樓上の會合に於ける早大委員の言に依れば、新學期早々早大にては前年交渉當時の話題より推して、今年は今慶早戦

を豫期し、豫科柔道部に對して豫科戦は無き旨言明し、從つて何等の準備も爲して居らないとの事であつた。我々は一勝二敗の後をうけて今年こそ是非勝ちたい、豫科に於ては十二分の自信があるのだ、是非戦ひ度い希望で、學院に對し交渉したのであるが、其の結果は前述同様即ち全慶早戦を豫期して何等準備なきこと、たとへ之から決行するとも時機既に遅く試験期に差支へるとの理由で、是亦中止の已むなきに至つたのである。

私は惟ふに、果して學院に試合續行の意思があつたか、甚だ疑はざるを得ない所であつた。然し如何に片方で力んだとて相手無くては試合にならぬ、塾側にも不用意の點なきにもあらねば諦めるの他なく、兩校委員は後援者側時事報知兩新聞社を訪れ、事情を明にし中止の旨を傳達したのであつた。以上述べし如く全、豫科戦、共に行れずして昨年を送つた我々は、今残された課題即ち今年全早稻田に對して戦ふか否かの問題に對し、一時も早く其の態度を決すべきの秋にある。

無論吾々は戦ふの意思を有する。然しそれには幾つかの條件を具備するであらう。今全早稻田と戦ふ事が假令我が部百年の計なりとし、一時の犠牲を忍ぶ決意はあるとも、徒に勝負を度外視する事は出来ない。即ち如何にして勝ち、如何にして勝敗を接近せしめるかや問題である。されば全然勝味無き試合は我々として應諾することは出来ない所である。

成る程一部先輩の御意見の如く、當今往々にして勝負法は卑劣に墮し、只勝たんが爲めの試合たるに過ぎざるの感あるに鑑み、あくまで慶早戦は正々堂々勝負に拘泥せず、清く美しく(これは必然的に立業に依る勝負を意味するものである)勝敗を決し、以て斯界の模範となり、試合改善の淵源たらしめるものでなければならぬかも知れない。

『勝敗に拘泥せず立業のみにて雌雄を決する』。之は單に見て樂しむ側、即ち第三者の言に過ぎないではなからうか。試合する人として果してそれが可能であるか、團體試合に於て既に勝ち越した側が引分の戦法を用ふるは、是れ當然にして試合法の定石とでもいへるものであらう。

又情況により立業にて對し難き時、寝業の必要が生ずる場合もある。引分けに、勝利に、且つ選手の體質により、又は

選手速成の點に於て、寢業も絶対に必要であると思はれる。我が部が今年對早稻田戦を行ふならば、選手の速成が急務であり、僅々一月位の合宿でも立業は勿論寢業の研究も必要であらう。相手時機に應ずる寢業の必要は、我が選手現状の然らしめる所である。我々は今秋こそはオール慶早戦を實現し、最も合理的戦法に依り必ず勝つの意氣を以て用意しつゝあるものである。希くば先輩諸士向後益々御指導御援助あらんことを。

(一〇) 雜記

本年度入部有段者

本年三月我が部は有力なる部員約十名を社會に送り出したが、四月に至りて左の新進巨豪を加へることが出來た。

二段 小宗正一(平戸中學)、梅澤正治(札幌中)、五島勇雄(商工部)、住野正春(麻布獸醫)

初段 長澤金次郎(修猷館)、大江寛(市立一中)、田中良平(會津中)、大宅五朗(鹿兒島二中)、相羽良次郎(普通部)
其他數名。

小宗、梅澤兩君は學生相撲界に於いて重きをなし、小宗君に至つては全國中學校相撲大會に於いて優勝したるもの、其將來は大いに期待して然かる可きであらう。長澤君は其の元氣と稽古熱心で道場を壓して居る。

此等新入部員を迎へて我部は今四段四名。三段五名。二段十四名。初段三十六名の有段者を有することになつた。

進級一括

○昇段者

○本年の鏡開式に於て昇段せる先輩左の如し

五段 中村愛作、吉武吉雄、平賀恒次郎、石渡泰三郎、中野榮三郎、中野森藏、清水耕作
右六段に進む

四段 中本吾一、太田次雄、岩崎三郎

右五段に進む

三段 秋山萬藏、高松徳藏

右四段に進む

二段 谷口宇多太郎

右三段に進む

○二月二十四日發表進級者

二級へ 杉原雪夫、田中久保、廣川謙三、駒井恒俊

一級へ 鈴木千一郎、阿部泰介、梶尾博

○二月十一日紅白勝負の進級者

二級へ 武林由雄

○二月十八日月次勝負の結果

二級へ 熊谷喜徳

一級へ 清川晃、峰岸猛

○六月の進級者

二級へ 伊丹正治、今井喜七、鈴木完、大間清三郎(編入)

一級へ 飯田正治、武林由雄、柳井敬三(編入)

○六月の進級者

二級へ、中川恭三、田中淳一郎、羽鳥忠久、乳井健一、古屋幸三、小西和夫

一級へ 磯邊義介、山内恒夫、千住榮一、石塚貫之助

○十一月二十七日月次勝負の結果

二級へ 大澤克夫

一級へ 箱田玄輔、熊谷喜徳

(一一) 三田柔友會記事

新年會

一月十四日(水)午後五時半より交詢社に於て開催。定刻一同設けの食卓に就き、デザートコースに入るや金澤會長より新年の挨拶を兼ねて、會員中先般の講道館鏡開式に於て昇段せる諸君の披露あり、お互に杯を舉げて昭和六年度の幸多かれかしと壽き合へり。

食後別室に於て懇談會に移る。先づ古武委員長より會計其他會務の報告をなし、次で講道館の改革に就き樞機に參畫せる飯塚茂氏並に這般東京學生聯合會の理事に推されたる菅原浩氏の報告演説あり、各自其立場に對し極力應援すべき事を申合せたり。

次で吉武飯塚兩氏提案に成る義塾柔道部發展策として、大會並に寒稽古を盛大にせしむる方法を考究する事。差當り本年の寒稽古は從來午前四時半より開始されたるを、三十分繰下げ、午前五時開始七時終了とし、通學者の便を圖る爲め朝食を道場にて喫し、其費用の一半を有志の寄附金にて補助する事に議纏りたり。

尙勤續二十五年の飯塚先生並に同十五年の中野先生の謝恩祝賀會を二月十一日（紀元節）に舉行する事、右に就き兩先生へ記念品贈呈の件、但其選擇は委員に一任の事、並に祝賀會當日本會員對現部員の紅白大試合を開催する事を決議せり。斯くて午後十時和氣霽々裡に散會、出席者左の如し。

飯塚師範、金澤會長、石渡泰三郎、飯塚茂、岩崎清一郎、岩崎三郎、箱田達磨、近岡源三、岡善次、尾山和男、太田次雄、海東要造、吉武吉雄、向山昌治、野田市太郎、柳井松祐、山本誠一、香下玄人、峰岸鎮治、宮永金太郎、清水行信、城田二郎、茂木信太郎、茂木邦吉、菅原浩、外に學生側より五島（三雄）、加藤（靖夫）、片山、沖の諸氏

委員會

十一月二十七日午後五時半より交詢社第三號室に於て開催。最近體育會内の氣風弛緩せりやの風説盛なるを以て、之が對策及び柔道部北陸地方巡回修行に關する情報其他に關し談合せり。

出席者

中村、峯岸、飯塚の各顧問、吉武委員長並に岩崎、五島、宮永、阿部（英）、太田（次）の各委員及び前委員

懇談會

○十一月三十日午後五時半より交詢社會議室に於て開催。柔道部現部員中にて兎角の非難あるものに對しては、部の將來

の爲め適當の處置をなすべしとの部よりの提案に對し協議を遂げ、其提案を諒とし、其處置に就ては部長師範に一任することゝなれり。又現部員より先般の北陸巡回修行の模様を聴取し種々懇談せり。

出席者

吉武委員長以下各委員並に現部員幹部九名

○十二月八日午後五時より綱町道場に於て現部員と合同の懇談會を催す。柴田部長の挨拶に次で金澤會長の懷舊談あり、終りて中村顧問は座談的に義塾柔道部創立後間もなき頃即ち福澤先生御在世中、如何に柔道部が先生の御眷顧を得たるか而して常に義塾の中心となりて勸善懲惡の實際運動に精進し來れるか等々の歴史を述べ、以て現在體育會の現狀に言及せらる。參集の學生一同深く感激せり。最後に飯塚(茂)顧問より所謂模範的武者修行をなさんとの動議提出され、滿場拍手して之に賛せり。即ち極く近日中に一泊の豫定にて栃木縣下に赴くこととし、學業に差支なき現部員有志が參加することゝなりたり。其費用全部を飯塚茂氏が負擔され、且つ氏自ら其指導者たることゝなれり。

出席者

現部員側よりは柴田部長、飯塚師範、並に學生幹部二十名、本會側よりは金澤會長、中村、峯岸、五島、岩崎、宮永の諸氏

關西支部記事

○五月廿八日 春期大會

出席者

平賀恒次郎、一坂功丸、松木貞一、伊藤巖、土井徹太郎、山名義廣、吉田精二、山川涉、坂岡多加志、中澤喜郎、藤卷

房雄、古賀徹、小川虎之助、本木誠三、足立茂、住田三郎、工虎之助、桑原忠助、永井元孝、大平博三、山本齋、白仁泰、河口禎一郎、和田善雄、山口義一、椎野政治、岸賢雄、榛葉達彌、松田彌一郎、豊島山人

○七月九日 松永進一氏歡迎會

出席者 來賓 松永進一

山川迪吉、本木誠三、堀尾幸、松本篤太郎、加藤直法、平賀恒次郎、永井元孝、土井徹太郎、山田久一、小川虎之助、工虎之助、鍋島透、白仁泰、足立茂、川村格、伊藤潤次郎、坂岡多加志、下野準三、榛葉達彌、萩原芳雄、的野三郎、藪田元治、山岡吉之助、和田義雄、豊島山人

○十一月二日 秋季大會

出席者

平林次郎、川口五郎、古田吉惠、和田義雄、桑原忠助、山川迪吉、永井元孝、伊藤保平、吉田精二、春日政衛、古賀徹、山本齋、足立茂、榛葉達彌、堀尾幸、山田久一、小川虎之助、太田貞巳、本木誠三、松原久雄、松波靖二郎、吉津辰行、鍋島透、青木茂、木下米松、土井徹太郎、坂東舜一、伊藤巖、瀧川朔郎、宮崎清、松田彌一郎、豊島山人

○十二月二十八日 忘年會

出席者

水野亨、伊藤巖、菅原剛寬、土井徹太郎、堀尾幸、一坂力丸、鍋島透、古賀徹、足立茂、小川虎之助、山脇房雄、工虎之助、松田彌一郎、山川迪吉、宮寺敏雄、榛葉達彌、山田久一、伊藤勇吉、坂本喜一郎